

叙事詩に楽しみを求めるのは間違っているだろうか

松村 祐香里

はじめに

叙事詩をどう楽しむか？というシンポジウムのテーマをふまえ、学生に叙事詩を楽しんでもらうために、研究者には何ができるかを検討した。本シンポジウムの前に、『妖精の女王』と『失樂園』について学生にアンケートをとったところ、難しいと感じている学生が大半であることが分かった。一方で、叙事詩のような展開を持つストーリーやその登場人物たちに親しみを覚えている学生も殊の外多かった。多くの学生が、試練を課された主人公が旅に出て敵と遭遇し、協力者に出会い、挫折し、修行し、最終的に黒幕を打ち倒すというプロットを経験的に知っていた。本発表では『妖精の女王』第1巻と『失樂園』も同様の構造を持っていることに着目し、赤十字の騎士と悪魔サタンの遍歴を比較した。そして、なぜ同様の展開を持ちながら真逆の結末に至ったのかを考察し、叙事詩を楽しむヒントを探した。

『妖精の女王』赤十字の騎士と『失樂園』サタンの冒険の比較

『妖精の女王』第1巻の大まかな流れは、赤十字の騎士が、貴婦人のユーナと共に旅をし、彼女の両親が治める国を悩ますドラゴンを退治する、というものである。途中で怪物に出会ったり、美女に誘惑され危機に陥ったりしながら、最終的に3日間の戦いの末ドラゴンを倒し、ユーナとの婚約をもって結末を迎える。続いて、本発表において『失樂園』の主人公とみなしたサタンは、天上での戦いに敗れた墮天使の長である。彼にとって失われた王国である天国を取り戻したいものの、敵（神）があまりにも強力であるため、神が大切にしているという人間を破滅させようと地球へ向かう。サタンは「死」、「混沌」と対峙し、絶望を乗り越え、人間を墮落させることに成功するが、最後は地獄で蛇に変えられてしまう。

『妖精の女王』はRPGの構造を持っている。赤十字の騎士は使命を受けられ、正体不明の美女と旅に出る。弱い敵を倒すというレベルを上げる作業を行い、別の戦士と出会い、諦めかけたときは姫に叱咤され、修行（悔悛）して強くなり、ラスボス（最後の敵のこと、ここではドラゴン）を退治し、凱旋したのち共に旅した姫の本当の姿を見て、結婚する。これらの流れは、1人の騎士の成長物語であると言えそうだ。『失樂園』では、冒険の初めに、サタンは、半身は美女で半身は蛇の姿をした敵に出会う。この敵の造形は、赤十字の騎士が最初に出会う敵と酷似しており、ミルトンがスペンサーを意識していたことは明らかである。しかしサタンと敵は戦うことなく和解してしまう。また、エデンの幸福そうな様を目の当たりにしたとき、サタンも絶望するが、叱咤してくれる道連れはいない。修行（悔悛）はなく、倒すことのできたラスボス（人間）はもともと脆い存在であった。つまるところサタンが描いた叙事詩は、彼の独りよがりな冒険物語だったのである。このように、キリスト教的な比喩や寓意などを全く知らなくても『妖精の女王』と『失樂園』にエンターテインメントの要素を見出すことはできるが、あるキーワードからアカデミックな読みに入っていきことも可能なのだという一例を示したい。

赤十字の騎士とサタンが同じような冒険をしていながら、正反対の結末に至ったのはなぜだろうか。表層的には、彼らの対照的な人間性に原因がある。赤十字の騎士は外部から試練に選ばれ、ことを成した後に他者から労われるのに対し、サタンは自分から試練の中に身を置き、自分から苦勞を大げさに語る。この矮小さが、サタンを滑稽な主人公にしている。より重要な要因は、二人が危機に陥った時、同じものを恐れていたというところに着目すると見えてくる。二人は共通して、絶望と神の永遠の怒りを恐れていた。この絶望という言葉は単純に望みが絶たれた状態だけでなく、キリスト教的救済がないという意味を含んでいる。自らを罪人であると認識し、あらかじめ定められた救済の枠から外れていると絶望する姿は、カルヴァンの言うところの「罪深い人間」であり、絶望は、そうした人間が陥るべくして陥る深い溝である。奥西が指摘しているように、赤十字の騎士の絶望の表象の中に、救済についての強いプロテスタント的な解釈を読み込むことは可能である。そして『妖精の女王』第1巻と『失樂園』は、ともに絶望と悔悛というキーワードを用いて、キリスト教徒の魂の成長の物語とみなすことができる。

以下に関連する場面をもう少し細かく見てみる。赤十字の騎士は、絶望の化身である「デスペア」と対決し、彼の弁舌によって自分の罪に絶望してしまい、自殺しそうになる。彼の最大の危機を救ったのは、ユーナの言葉だった。ユーナは騎士を「選ばれた者」と呼び、大いなる恩寵が彼を守っていると説く。そして騎士を再びドラゴン退治へと向かわせるため、彼を「苦行」、「呵責」、「悔悛」の元へと連れて行く。これは敵に打ちのめ

された後、主人公が否応なく取り組む修行である。ただし、騎士に必要なのは強さだけではなく、信仰と恩寵に基づいた強さであるために、ユーナは彼を「慈悲」の元へと導く。寛大で憐れみ深い「慈悲」に導かれて丘の上のコンテンプレーションを訪ね、完全に信仰を取り戻した騎士は、自分の役目を思い出し、ドラゴン退治に向かう。騎士がドラゴンを退治するためには神の恩寵が不可欠であるという記述は、当時イングランドの国民が持つべき信仰を列挙した「39ヶ条」の第10条の「神の恩寵があつてはじめて人は信仰を持ち、内なる呼びかけに答え、善行をなすとげられる」という文言に従っている。そして赤十字の騎士にとっての恩寵は、ユーナが体現していた。最後にユーナがずっと隠してきた顔を見せるという行為も、騎士が恩寵を正しく理解したために初めて見ることを許されたとみなすことができるからだ。以上のことから、赤十字の騎士の冒険は、一度は罪に落ちて絶望しても、神の恩寵を通して悔悛し、善行をなした正しきキリスト教徒の物語なのである。

一方、サタンは混沌の海を越えて地球にたどり着いたとき、その美しさや平穏さと自らの状況を比べ、絶望してしまう。悔悛と許しの余地はないのかと嘆く半面、屈服するしか道がなく、それは出来ない決めつけ、みずから悔悛の機会を拒む。サタンには呵責はあっても悔悛と癒しの瞬間はなく、気力で絶望をねじ伏せ、当初の目的を達成する。「絶望」、「永遠の怒り」、「悔悛」といった言葉を使っていることから、彼の心象もまたプロテスタント的な救済観の文脈のなかにおいて解釈することができる。そしてサタンは恩寵も悔悛のチャンスも拒絶しているため、救済されなくとも当然なのである。

叙事詩を楽しむために

主人公が旅に出て、危機に遭遇しながら成長し、最後に勝利を収めるという物語を、人生で一度も楽しんでいない人はほとんどいないだろう。むしろ、少年誌が主流の娯楽となっている現状は、多くのひとが「叙事詩的な」物語を好んでいるという証拠ではないか。そうであれば、叙事詩を面白いと感じる土壤は必ずあるはずである。そうしたなかで学生に本物の叙事詩に触れてもらうために研究者にできることは、叙事詩の *accessible* な部分を提示し、その入り口となることだと考える。こうした楽しみ方は、詩人それぞれの文学史的位置付けや韻律の美しさを無視しており、詩人を本当に理解したとは言えないという批判はもっともであるが、今日の学生たちに敬遠され、忘れられる方がより深刻な問題であろう。研究者自身が楽しみながら、彼らに馴染みやすい言葉で表すことが求められているのではないだろうか。

参考文献

- Milton, John, *Paradise Lost*, ed. by Alastair Fowler, 2nd edn (London: Longman, 1997)
- Spenser, Edmund, *The Faerie Queene*, ed. by A.C. Hamilton (London: Longman, 2007)
- Eire, Carols M. N., *Reformations: the Early Modern World, 1450-1650* (Yale: Yale University Press, 2016)
- King, Andrew, *The Faerie Queene and Middle English Romance: the Matter of Just Memory* (Oxford: Oxford University Press, 2000)
- Sullivan, Erin, 'Doctrinal Doubleness and the Meaning of Despair in William Perkins's *Table* and Nathaniel Woodes's *The Conflict of Conscience*', *Studies in Philology*, 110, 3 (2013), 533-61
- 奥西豊子 「『妖精の女王』における「神聖」」 *Zephyr* (2018), 30, 46-61
- 竹村はるみ 「赤十字の騎士と消えた聖人の行方」『詩人の詩人スペンサー：日本スペンサー協会 20周年論集』日本スペンサー協会編（九州大学出版会、2006年）21-34
- コリン・バロウ 『スペンサーとその時代』小田原瑤子訳（南雲堂、2011年）